

〔座談会〕

# 人文学科の可能性

平成十四年四月、  
これまでの四学科が統合されて、  
人文学科としての第一歩を踏み出しました。  
これを機に、「人文学」をテーマに、  
自由にお話しいただきました。

〔出席者紹介〕（五十音順・敬称略）

●出席者

石田信一（西洋文化史専攻）

川平ひとし（和歌文学・中世文学専攻）

北澤憲昭（日本近現代美術史専攻）

クリス・ドレイク（英語・比較文化専攻）

●司会

池上貞子（中国語・中国近現代文学専攻）

〔日時・場所〕

平成十四年十一月二十三日（土曜日）

跡見学園女子大学・二号館・談話室

## 人文学科の半年

**司会（池上真子）** 人文学科が立ち上がった、半年がすぎました。昨年度までの跡見の文学部は、国文学科、美学美術史科、英文学科、文化学科という四つの学科で構成されていたわけですが、今年度から、その垣根を取り払って「人文学科」という一つの学科にし、あらたに臨床心理学科を設けて二学科編成になりました。今日は、従来の四学科からそれぞれお一人ずつ四人の先生にご出席いただいて、この数ヶ月を振り返って、お話をいただくように思っております。中世の和歌文学をご研究されている川平ひとしさん、近現代美術史を研究されておられる北澤憲昭さん、もともと江戸文学の研究者でいらして本学では英語を教えていらっしゃるクリス・ドレイクさん、それから西洋文化史がご専門の石田信一さんです。司会は、私、池上がつとめさせていただきます。

ます。ちなみに、私は中国の近現代文学を専攻いたしております。

大学は、教育と研究の場であるわけですが、人文学科は始動して間もないわけですから、そこから新しい研究がでてくるといふ段階では、まだありません。教育にかんしても、その可能性については、まだまだ未知数が多いように思います。ただ、教育については、このおよそ半年の経験に立って語り合うこともできると思いますので、教育の側面から考えはじめて、研究の在り方へと話が結びついてゆけばと思います。では、この座談会の企画にかかわられた北澤さんに口火を切っていただくことにいたします。よろしくお願いします。

**北澤憲昭** 人文学科における教育と研究について、あくまでも個人的な考えを一教員としての立場から、いささか理想主義的に語らせていただきたいと思います。人文学科における修学はコース制によ

って行なわれることになっていきます。学生は数ある選択科目の中から自分で学びたいことを選んで、自分が見届けたいと思うテーマに即して修学のメニューを自分自身で組み立てていくシステムになっているわけです。複合的もしくは総合的な学習や研究を行うシステムと言ってもよろしいかと思えます。

こういう制度のもとでは、学生は、これまでのように美術史学なら美術史学、英文学なら英文学という学問を身につけるために入学してくるわけではなくて、自分のテーマを探しながらさまざまな科目を学んでいくこととなります。いわば在学しているあいだに学生たちはいろいろな学問を旅して歩くわけで、自分のテーマについて自前の理論をあみだしながら、手探りで研究をすすめてゆくこととなります。これは一見非常に大変そうにもみえますが、楽しい知識の旅というようにとらえることもできるだろうと思います。

そのためにはまず学生に自発性が求められるのですが、一年生だと、まだ、学問のABCも分かりませんし、学年が進んでも学生が独自に理論を編み出すというのはむづかしい。そこで、アカデミック・アドヴァイザーという制度が設けられておりまして、教員が個々の学生のメニユー作成に個別的な助言を行うことになっていきます。つまり、テーマ、理論、手法にかんして学生の相談にのりながら、単位の取り方も視野におさめつつ、学問することの自発性を学生から引き出し、いこうというわけです。つまり、本来的なエデュケーション——能力を引き出すという意味での教育がアカデミック・アドヴァイザーに求められていると言つてよろしいかと思えます。

さて、垣根を取り払ったところで生まれてくる教育上の可能性についてですが、正直に言つて試行錯誤を繰り返していくほかないだろうと感じています。この半年間の実感としてそう思います。研究や

教育というのは確立された学問の規律や手法によつて行なわれるべきだという発想からすれば、試行錯誤というのはいかにも無責任のように聞こえるかもしれませんが、必ずしもそうは言えません。研究、教育には試行錯誤が必ずついて回ります。研究における試行錯誤は言うに及ばず、教育の場面でも、たとえば授業に関するアンケートをとつてそれを反省の材料にするということがありますし、ゼミなどで学生の個人の指導に当るときなどは、まさに試行錯誤の連続です。これは経験的に言えることです。ましてやコース制でアカデミック・アドヴァイザーの任に当たるとなると、試行錯誤以外には考えられないのではないかとさえ思います。いいかえれば、達成へ向けて軌道修正を行いながら指導してゆくということとです。

同じことは、おそらく人文系学科体制下の研究に関しても言えると思います。そもそもコース制というのが学生のためだ

けのものではあり得ないと考えるからです。つまり、それぞれの研究者が、自分のデイシプリンに閉じこもっていたのではとてもアカデミック・アドヴァイザーなどやっていけない。学生とともに授業と授業の関連について考え、試行を繰り返しつつ問いかけていかなければ学生を導くことなどできません。

このような見方に立つて、ぼくは、アカデミック・アドヴァイザーとして教員が受け持つ学生というのは、教員にとつても自己啓発の重要な契機になるのではないかと思っています。実際のところ、このような構えをとらないかぎり、人文系学科としての実をあげるのは難しいのではないのでしょうか。

それからもうひとつ、教員同士の関わり、人と人との関わりということが課題になってくると思います。従来の学科の垣根を越える発想を学生がとるためには、教員自身がそういう発想に立つて連携をしていくのでなければ、やはりうまくい

## 能力を引き出すという意味での教育が アカデミック・アドヴァイザーに求められている



北澤憲昭

かない。

そのために何をすべきか。いかなる条件が必要か。そこには非常に複雑な問題が絡んできますが、たとえば、こういう問題にかんしてインターディシプリナリイということがよく言われます。横断型の学際研究ということですが、これは、まだ学問の方法としての明快さを持つには至っていないように思われます。

妙案はないのかと言われれば、そんなものはなくて、それこそ試行錯誤するし

かないのですが、ひとつの態度として申しあげれば、学術的な厳密さと抵触しないかぎりでの「寛容さ」が必要なのではないかと思えます。

制度的な面で考えますと、この大学にはもともと総合科目という科目があり、異分野の教員が二人一組で授業を行ってきた経験があります。これから、そういう仕組みをもっと重視していく必要があるのではないのでしょうか。しかしその場合にも「寛容」が前提とされなければ、功を奏するのは難しいだろうと思えます。なんだか「学長」みたいな口をきいておられますが(笑)、以上は、あくまでも一教員の自戒の意味を込めた発言であるというふうにお受けとりいただければ幸いです。

### 総合科目の経験

川平ひとし キーノート・スピーチをな

さったと思えます。新しい制度の問題、それを担っていく教育、研究しているわれわれの主体の問題にまで踏みこみ、これからどうすればよいかまでおっしゃったので、文字どおり基調的なお話だったと思えます。制度の改革というのは、ある意味では外側から与えられる面もあると思えます。主体の側と制度の側との相互関係が生き生きとはたらくのが何よりだと思えますが、そこで重要なのは、今私たちのおかれている状況が実は私たち自身の抱えている個々の領域の研究状況と連動していて、無関係ではないということだと思えます。今ここで試行錯誤を繰り返すにしても、研究する主体である自分自身の問題とどんなふうに相互連関するのかが、せっかく異なる専門の五人が集まっているのですから、のちほど論議の焦点のひとつになればと思えます。

司会 北澤さんから総合科目の話ができましたが、ドレイクさんは、同じく江戸文

学がご専門で、浮世絵にもお詳しくていらっしゃる岩田秀行さんとお二人で、この科目を受け持つておられますね。

**クリス・ドレイク** 岩田さんの総合科目では、日本の芸術と文芸をアメリカと日本のふたつの観点から見るということをやっているのですが、こうした試みに人文学科でも積極的に取り組む必要があるだろうと思います。日本文学ばかりではなく、さまざまな対象について議論してゆく、しかも、二人だけでなく、三人か四人で討議してゆくような授業をつかってゆく必要を感じます。アメリカでは、特に人文系統の科目でよくやるのですが、人文学科でも、こういうやり方の授業を、積極的に行ってゆくべきだと思います。

複数の教師が同じテキストをいろいろな角度から読んでゆく、つまり、いろいろな読み方と方法論の違いがあることを具体的に学生に示してみせるわけですが、これを教えるのは早い方がいい。一年生

のときから、いろいろな方法論を身につけて、現象を多角的に見てゆく態度を身につけるようにしてあげることが必要です。そのために、教員同士がいろいろな方法論で学生の前で討論することは非常にいいことです。学生はそのようすを見て、教師の言うことばかりではなく、自分の意見も大事だということを、自分の意見は先生と違うけれども、違う意見があつていいのだということに自覚してゆくのにちがいがありません。それは、考える意気込みにもつながってゆくと思います。英語で言うキャンオン、つまり、古典を聖典と考えて古典的な価値観や方法論への崇拜を身につけさせるといふやり方は、もはや時代にそぐわないと思います。

**北澤** ドレイクさんと岩田さんは、セッションを楽しんでおられるようですが、学生の反応はいかがですか。

**ドレイク** 岩田さんは、じつにうまいで

す。よく学生のあいだにマイクを持って入っていったら、学生と対話することを積極的に授業に取り込んでいます。落語もできますしね。われわれの授業も内容のある漫才みたいだと時に言われます(笑)。笑いのなかで、硬さがほぐれて自分の意見を言えるようになってゆくんです。

われわれが、総合科目の授業で闘っているのは学生の沈黙です。学生は授業が終わってから私的に自分の意見を言いますが、そうではなく授業中に皆の前で自分の意見を言つてゆかなければならない。対話形式の授業ですが、これは、俳諧とか連歌に通じる伝統的な日本のやり方だと思つています。対話形式の授業というのは集団的な創作の方法と非常に深い関係をもつていると考えるのです。学生は一方的に情報を受けるのではなく、みずから授業の創造に加わるわけです。

将来は、複数の教員が行う授業のホームページをつくりたいと思つています。学生たちと教員が、たがいに自分の意見

を言い合うフォーラムです。そこで自分の発句や作品を発表するのもいいですね。じつさい、去年の授業では連句を書かせました。俳句を書く学生がいるのですが、発句を書いて、他の学生に自分のイメージを任せる。他の人によって自分のイメージが変更されるわけです。あとで聞くと言っていたら、非常にうれしかったと言っていました。

**司会** 学生と教員二人の三者間の対話によってフォーラムの形が成り立っているわけですね。

**川平** 大変意欲的で創造的な授業をなさっていると思います。総合科目は四学科体制の授業で、すでに蓄積があるわけですが、人文学科の発足で、授業形態そのものも従来なかったものが試みられる条件ができたと思います。

**北澤** コース制においては、教員同士がこれから連携プレーをしなければならな

い場面も、たくさんでてくると思います。連携への配慮は、従来の総合科目のような複数の教師が担当する科目ばかりではなく、一人の教員が担当する授業でも必要になってくるのにはちがありません。たとえば、どういう先生がおられて、何を専門に研究されておられるかというような情報を、機会をとらえて積極的に学生に伝えて行くような配慮です。学生は、そういうことに意外と疎いですから。

これまでの総合科目の経験を、反省点も含めて、さまざまなかたちで生かしてゆくよう心がけるべきではないでしょうか。たんに授業の手法にかんしてばかりではなく、たとえば共同研究のような試みが総合科目の経験のなかから、もって出てきてもいいのではないかと思います。

そのためには、何らかの制度的な手当も必要ですが、かならずしも制度に頼らなくても可能なことはあります。一例を申しあげますと、この数年間、学生たちと読書会を断続的に開いてきたのですが、

ここでは、学年間の研究上の交流というものもあり、学科を越えた学生同士の交流もみられました。制度の脇で、こういう形のものが、教員も巻き込んであちこちに起こってくるということは、心がけ次第でじゅうぶん可能であるし、教育的に資するところも大きいのではないかと思います。

## 大学の変容

**司会** 先ほどからのドレイクさんのお話をうかがっていますと、これまでの専門家を育てる教育というのは、かなり授業の在り方が異なるように思いますが……。

**ドレイク** 学部というのは、専門家を育てるのではなくて、生きること考えることだということを学生たちに分かってもらう場だと思っています。専門家は修士課程、博士課程でというのはアメリカ

## 主体の側と制度の側との相互連関が 生き生きとはたらくことが重要だと思う



川平ひとし

では既定のことですが、だんだん日本もそうなってきたと思います。

**北澤** 学問、社会の変化が、ますます急速化しつつありますから、たしかに学部段階だけで専門家を養成するというのは非常に難しくなってきたと思います。

**ドレイク** 専門家教育より、

人間対人間の教育、つまりヒューマニゼーションが非常に重要になってゆくのではないのでしょうか。学生の立場を教員が想像しながら、教員同士で連携の可能性を探りあってゆくというのが人文学科のやり方だと思います。

**石田信一** これまでのお話は、人文学科で何ができるのか、どうすべきなのかといった、ある種の理想的な学部教育のあり方についての議論だったかと思えます。しかし、たとえば専門家教育が困難であるのは事実であるにしても、まったく専門性を持たずに何かを学んでいくということが可能かどうかには疑問があります。また、人文学科のカリキュラムは内容的には非常に充実していると思いますが、時間割の組み立てがきわめて自由なので、それを有効に活用できるかどうかは、学生自身の考え方によるところが大きいのではないのでしょうか。最初に北澤さんがお話しになったように、自分でメニュー

を組み立てていく作業を学生自身が「楽しい知識の旅」ととらえ、うまく活かしてくればよいのですが、学年が上がるにつれて、メニューを組み立てる際に生じるトラブルがますます増えていく可能性もあり、あまり楽観的に考えてはいけない気がします。

**川平** もっとベシミステックな言い方をすると、どんな制度をつくっても制度はいつも悪夢を孕んでいるのかも知れませんが。制度はやはりフレーム。フレームを意味あらしめたり、実質を作るのは、どんなカリキュラムのもとであつても常に工夫していかなければいけないと思います。今の石田さんの発言はよく納得できますが、内実については無限に何か開かれていると思わないと、私たちのこういう話も成り立たないと思います。

**石田** 専門性との関連で言うと、一年生の段階というのは、まだ学生が自分の専

門を選ぶ時期ではなくて、それが実際に意識されるのは今後のことだと思えます。第一セメスターが終わった段階で、自分の専門について深くあれやこれやと考え始めるというのは、むしろ珍しいと思います。学生がそうした相談に来るのは、二年生になり、第四セメスター、第六セメスターの区切りのところに至ってからはないでしょうか。

**北澤** ぼくの場合で言いますと、テーマがなかなかみつきりそうにない学生には、たとえば石田さんの西洋史の授業を受けてみてはどうか、とにかく歴史を学んで視野を広げることが大切だというような勧め方をしています。それから科学論のような方法にまつわる授業なども早い時期にとっておいていいのではないかと思えます。つまりテーマ探しの段階で、専門性へ向けていろいろとアドヴァイスを与えることはあると考えるわけです。

**石田** もちろん、学生の相談に応じてそういうことはあるでしょうし、必要なことだと思えます。アドヴァイザーはもとより、各教員がそうした役割を担うべきだという認識を持つことが求められているのではないのでしょうか。

**司会** ドレイクさん、アメリカの場合はどうですか？

**ドレイク** 時間的には、跡見と同じように、三〇分とか一時間の相談が米国の場合も多いですが、米国の大学のアカデミック・アドヴァイザーというのは、単位の取り方といったような相談だけではなく、何よりも学ぶことの内容にかかわっています。学問にかんする相談をするわけです。カリキュラム上は、二年生、三年生にならないと、専門性の高い授業をとることもできないのですが、いろいろな先生と話し合ってアドヴァイスを受ける。たとえば、この本を読めばいいとか、

このように研究すればいいといった話です。

米国の場合、学部の学生は何よりもまず学問と自分の人生との関連を実践的に考える傾向がありますから、教員も、こういうふうには自分は勉強してきたという個人的な体験にもとづいて応ずることがよくあります。学生も、先生の情熱と知的愛情に触発されているいろいろな質問をするわけです。内容は、授業を受ける順番や、専門的なことにまで及びます。

コース制が旅だと北澤さんはおっしゃいましたが、教師も、知の世界をさまざまに旅をしているわけです。その旅がどういうものなのかを知ることができると、知的な旅に出発することができますのだと思います。こういうことは、来年からは、われわれも、じゅうぶん意識しなければならぬですね。

**川平** 学部の低学年のときに、教員はどういうふうな学問と関わったのかという



本質的な話を聞くことができるのは貴重だと思います。学問の方向が定まっている大学院生はよいとして、重要なのは学部的一年生です。一年生をしっかりと方向付けたり、一年生に何かを植えつけることが重要だと思います。ただ、現状を考えると制度的に十分でない面が多いけれど、人文学科ができて、これまで以上に一年生のハートをつかむ工夫ができるかどうかはすごく大切な点ですね。ドレイクさんのお話を聞いてそんなことを考えました。

**北澤** 学生とのかかわり方ということで申しますと、教養、知識を注入するタイプのやり方は通用しにくくなってきているという実感があります。若い人たちの学問に対する考え方は、知性の在り方が変わってきているように思います。注入型を歓迎する学生もいるように思いますが、これを単純に善しとするわけにはいきません。知識の注入というのは、

受験勉強で明快な答えの出るマニュアル的な勉強をしてきた若いひとたちに迎合するスタイルなのかもしれないと思うからです。ぼくなども、専門の講義となると、つい注入型に陥ってしまいがちなものですから、もっと工夫しなければならぬと反省しています。

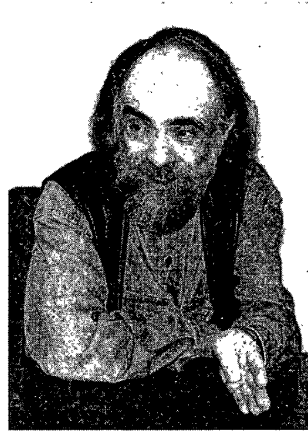
若いひとたちの変容ぶりについて、もう少し申し上げますと、人生観にせよ、倫理観にせよ、正義感にせよ、その発想の基盤が、こちらと大きく違っていて、とりつくシマがないという思いを抱くことさえあります。しかし、そうした学生たちの背後に時代の相が浮かび上がってくるような気がしないでもありません。学生の背後に広がる状況、時代の動き、これとどうコミットメントしていくのか、この問題は、たんに教育の問題ではなくて、自分がやっている研究のアクチュアリティに関わる問題でもあるのではないかと思います。学生とのかかわりのなかで時代と触れあい、そうすることで、

こちらの研究も、教育の在り方も変わってゆく、こういうダイナミックな関係が結べるようになると思います。

### フォーラムとしての人文学科

**川平** ドレイクさんの言われるのを受けて言うと、人文学科で何ができるかということですね。二つに分けると、一つは、教員相互に、形が一応できたフォーラムをもとにして、何かできるかどうか、もう一つは、具体的な授業の場で、フォーラムと連動しながら、生産的な何かができるかどうかです。このうち、教員相互のフォーラムは大事だと思うのです。この場のように、違った分野のお話を聞くことの面白さは従来よりも増えたという感じが、少しだけあります。従来だって、やろうと思えば、できたわけですが。増えたといっても、まだ気分、雰囲気であって、それを実体化して、具体的に共同研究するなどというところまでは、いつ

専門家教育より、人間対人間の教育、  
ビューマニゼーションが重要になってゆく



クリス・ドレイク

ていないし、できていない。ただ、何人かの方にお会いすると、一緒に勉強会でもやろうという話があります。今のところは忙しいからというのが、少し口実になっていますが、フォーラムを意義あらしめるといふ課題は明らかだと思います。もう一つの、教育の現場については、具体的な方法論や技術論を突き合わせてみるべきだと思います。全国にすでにある人文学部、人文学科や人文学研究科で、いろいろなことが試みられていると思

います。

ますが、跡見のまだできたてのフォーラムを媒介にして何ができるか、試みてみたいですね。人文学科の課題だと思います。

**北澤** アドホックな結びつきが、随所でできているという印象は、ほくももっています。しかし、そこからフォーラムみたいなものを制度的に整備するよりも、当面は、いろいろなところで、いろいろな関係が錯綜しながら、あちらこちらに結び目ができていくという形が望ましいように思います。

**川平** 教員の研究でいえば、今後、共同研究が増えていくと思います。今までの、国文なら国文、英文なら英文といった枠のなかでの共同研究ではなくて、人文学科を母体にして異なる分野からの共同研究の可能性が従来以上に増えてよいのだと思います。

**石田** 共同研究の可能性が高まること、その意義については、大いに賛成です。例えば、日本研究やヨーロッパ研究といった学問分野を超えた地域研究的手法による共同研究が期待できるのではないのでしょうか。教員相互のフォーラムについても、まだはつきりと形が見えないものの、そのようなものができれば素晴らしいことだと思います。

**司会** 川平さんがおっしゃったように、教員相互のフォーラムで何ができるか、それと、そのことを教育の現場といいますが、学生にどういふふうに変元ということ、反映できるかということを探求してゆくことが大切だと思います。フォーラムについては、ある種の委員会なりが設定する形で始めるといふのもひとつの手かもしれませんね。それから、もうひとつは、北澤さんからお話が出たように、関心のある方、興味のある方が自然発生的に集まって共同研究が生まれてゆ

くという動きも並行して盛り上がってゆかなければ、内実がともなわれないものなるおそれがあると思います。

## 学術研究の現状と授業の在り方

**司会** 先ほど北澤さんが、人文学科の体制と、個人的な学問研究が、どうかかわるかという問題を出しておられましたが、これはインターディシプリナリイ・スタディ（学際研究）という発想ともかわる事柄だと思います。川平さん、この点についていかがお考えですか。

**川平** 「学際」を捉える際の意識や視座の問題がまずあります。日本文学研究の領域では、跡見の国文学科の命数とも関係しますが、「国文学」か「日本文学」ということが学科・学会の組織や名称の問題ともからんで論議的ですし、「国語学」か「日本語学」という問いも同様です。境界がどんどん壊れていく、あるいは、

どんどん壊れていくという動きがあります。

すべては視野と視座にかかわるのだと思います。従来やってきた研究を広い世界につなげていくための試行錯誤が始まっているのでしよう。古典和歌研究の領域では、従来の方法に従って精細化してゆく研究があり、領域の開拓も当然あります。隣接の学と接触する面を確かめるといふ視点が意識化されてきていると見えます。和歌文学会論集（兼築信行・田淵句美子責任編集）『和歌を歴史から読む』（二〇〇二 笠間書院）は最近の成果です。外からの目によつて、自己の立場を意識化する契機が得られます。個人的には、外国人研究者による和歌研究から己を振り返るヒントが得られるという経験が少なくありません。ただ、こうした動きの中で気づいたことや若干の試みを、授業の現場での実践とどう連携させるかは難題です。私自身うまくできているとは、とても言えません。

**司会** 石田さんは、いかがですか。

**石田** まず、学部教育におけるカテゴリーとして大きく分けて概論的な科目と各論的な科目というのがあると思うのですが、私はとくに概論的な科目というのは基本的に教えるべきことが常にあるのではないかという考えを持っています。私自身が歴史学を専門にしているので、とくにそう思えるのかも知れませんが、どんなに時代状況が変わっても、取り上げべきテーマや考え方について、これだけは必要だという部分は残っていくのではないでしょう。もちろん、内容的な問題とは別に、授業運営上の工夫を怠るべきでないことは言うまでもありませんが。

一方、各論的な科目のほうは、それぞれ状況に応じて取り上げるべきテーマが大きく変動すると思いますし、西洋史学なら西洋史学における最新の研究動向あるいは研究成果がある程度は反映させて

よいのだと考えます。特殊講義や演習などは当然として、その他の各論的な科目についても、そのような試みがあつてよいのではないでしょうか。私自身に關して言えば、「西洋史概説」のような科目は内容的な変化がほとんどないのに対して、「民族問題」や「多文化社会」といった科目は、つねにテーマ自体を問い直し、更新しながら運営していくことになるかと思ひます。私は東ヨーロッパ地域のナシヨナリズムや民族問題を専門としているのですが、こうした問題は現在でも揺れ動いており、位置づけが難しい上に、確立された分析手法というものが存在しません。結局、実際の授業でも、考える素材を提供し、基本的な考え方の一例を紹介するだけにとどまることが多いのですが、ある問題に取り組むプロセス自体が何よりも重要なのであり、何らかの結論に到達しなくても十分に意味があるのだと考えます。その点では、すでに述べたことでもありますが、基本的に教えるべ

きがあつて、それを切り捨てること  
が難しい歴史教育のほうが、やや窮屈な  
ところがあるかも知れません。

さて、この歴史学、とくに西洋史学について申しますと、私自身が歴史理論を専門にしているわけではないので、不案内なところもあるのですが、個別的な事例研究が着実に成果をあげているのに対して、新しい「理論」上での展開がある種の行き詰まりを見せているというのが実情ではないでしょうか。いわゆる学際的研究にしても、すでに試行錯誤的によくの意欲的な試みがなされていて、インパクトのあるものは生じにくくなっています。七〇年代から八〇年代にかけて「社会史」が持つていた魅力というのは、もちろん現在でも失われてはいないし、それなりの有効性を持つ手法であろうとは思いますが、何か新しいものを提示するとう機会は少なくなっているように思われます。このような状況の下で、どうすれば実際の学部教育に西洋史学にお

ける最新の研究成果を組み入れることができるのかは、非常に難しい問題になってくるのではないのでしょうか。例えば、従来の国民史への批判的傾向とあわせて、一方ではグローバル・ヒストリー、もう一方では地域史といった方向も出てきていますが、まだ教育の現場に反映できるほどに定着してはいないように思われます。学部教育でできることの限界を認識しつつ、よく考えていかなければならない問題だろうと思ひます。

#### 連歌・学際・国境

司会 ドレイクさんは、学際研究についていかがお考えですか。

ドレイク 米国における日本文学研究について申しますと、無理に理論にあてはめる傾向があるかのように思われます。連歌や俳諧の研究者も陥りやすいところ  
です。一句一句を丁寧に読まなければ研



問題に取り組むプロセス自体が重要であり  
何らかの結論に到達しなくても意味がある

石田信一

究がはじまらない分野なのに短絡的にグラマーラスな理論で処理しようとする傾向がある。そのような理論のあてはめより、昔から日本で行われていた共同的な輪講の方が非常によかったと思います。その反面に、アメリカでは統一されたテーマに貫かれた学際的な論文集が増えて、成果をあげている。同時に諸大学は学際

的、多視点の思考を育成するために、学部科目として、立場や方法論などが対立している三から五名の教員に同じ科目を担当してもらうことが多くあります。学生の前で教員たちが、その科目のテーマ——たとえば『源氏物語』と英仏小説の相違——について激論するのです。こういう科目は人文学系に最も多くあつて、学生にはかなり人気があります。日本でも、さまざまな分野の教師が集まってテーマを共通にして論じるというのが、いま、けっこうたくさん行われていると思うんですが、本学ではそれがほとんどなくて総合科目の一部でしか実現されてこなかった。これから、そういう形で授業が運営できれば教員相互の交流にもなるでしょうし、学生にとっても新しい視点が開けると思います。これは各教員が授業をする際に学際的な視点からやればできるというのでなくて、やはり授業の形態にかかわる事柄だと思います。ただし、全部が学際的というか、人文学

的な方向で授業をやればいいと思ってるわけではありません。そうすることが必要な科目もあれば、そうではなくてむしろディシプリン重視でやるべきものもあると思います。

**司会** 北澤さんは、いかがお考えですか。

**北澤** だいたいインターディシプリナリイというのは、みずからのディシプリンを堅持していかざり成り立ちようのないものですからね。まったく、ドレイクさんのおっしゃるとおりだと思います。デイスカッションの大切さも、おっしゃるとおりだと思います。ただ、その一方で、いわば知の「入会地」というものが、果してどういう形で成り立つのかということが、人文学科ということだけじゃなくて、学問の大きな趨勢にかんがみても大切な問題だろうと考えます。それは、共同的な場面においてばかりではなく、個々の研究においても意識されてしかる

べき事柄だと思います。

石田さんが、国民史への批判的傾向に触れておられました。一見、非政治的な学問とみられがちな美術史も現在の国家の問題と深くかかわっています。跡見に非常勤で来ていただいている井手誠之輔さんという東京文化財研究所の研究員の方がいらっしゃるんですけど、この方は、現在「請来仏画」の研究をなさっていて、重要文化財に指定されている作品の国籍という問題をされている。国籍が揺れている仏画があるというのですが、国籍というのは美術史にとっても非常に重要な問題なんです。美術史というのはイメージの精細な連鎖で出来上がっているものですから、ある仏画が、中国でできたのか、朝鮮半島のどこでつくられたのか、その国籍が揺れるということとは、一国の美術史の全部にかかわってくる事柄であるわけです。

この点をとらえて、井手さんは、こうした問題は、じつは現在の国境にとらわ

れていることから派生する、いわば偽の問題ではないのかということ指摘されています。つまり、仏画の国籍問題というのは、近代につくられた国民国家という枠の中で発想するから、そういう問題が起こってくるのだというわけです。しかも、こういう国籍にとらわれた発想は、個々の作品が属していたはずの歴史的、社会的、文化的文脈を見失わせてしまうのではないかと言っておられる。古美術を学術的にも優れた手法で扱いながら、なおかつ現代の政治的な問題につながってくる素晴らしい例だと、ぼくは思っています。美術史学の現状について申しますと、こういう事例があげられます。

**川平** 時代区分という問題もありますね。時代区分を日本一国内でやると必ず境界に突き当たることになるのだと思います。どこからが古代で中世はいつからなのか、朝鮮半島から見たら多分違った見方が出てくる。中国まで視野に入れたら古代も

中世も近代も、揺れ動いてくるはず。視野の広がりや視座の取り方によって一国内の時代区分が相対化されるのはほとんど必然的だと思う。日本の中世の区分も同様です。ヨーロッパももちろん違いますが、東アジアの諸国間の相互交渉の中で見ると、日本史の時代区分は見直される。村井章介氏をはじめとする論者の提議がすでになされています。対象地域の見方を広げていけば必ず視差の問題に行き着くと思います。

**司会** 石田さん、この問題についていかがですか。

**石田** いま取り上げられた時代区分の問題を含めて、ヨーロッパ史に関しても、日本史あるいは東洋史との比較を行うことで、あるいはグローバルな横のつながりに注目することで得られるものは大きいと思います。また、日本を東アジア史という観点からとらえ直すのと同じよう

な意味で、ヨーロッパにおける国家や地域の再評価というのも行われていて、個人的にはこのことに強い関心を持っています。下位地域の個別事例が全体の中でどう位置づけられていくのか、その相互の関連をどのようにとらえていくかといったことです。ご承知のように、ヨーロッパはヨーロッパ統合に向かっていて、そこには政策的な側面もあるわけですが、あちこちで自分たちもヨーロッパの歴史の一部であるということを主張するようになっていくように見えるからです。

さらに言えば、現在の歴史学というのは、近代歴史学が発足した時に、あくまでも各国史というか、国民史なり民族史という形で誕生し発展してきたものを、そうではないものに組み替えていくことが進行中なのだと思います。やや繰り返しになりますが、一方ではヨーロッパを各国史ではない広い視野からとらえようとする傾向が出てきていますし、もう一方では国以下の地域史というか、地方

史というのが盛んに行なわれるようになっていきます。とくに地域史などでは、それまでの政治史に偏重しがちだった歴史をさまざまな分野からとらえ直すという側面もあるのではないのでしょうか。社会学や民族学などと密接に関連した学際的研究も試みられており、そういった意味での多様化がますます進んでいくのだと思います。

## 「人文学」について

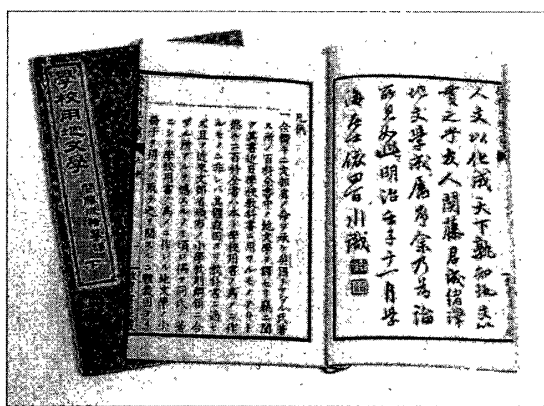
**司会** さきほどから「人文学科」という名称のもとにお話していただいているんですが、この「人文学」というのは、いったいどういう学問であるのか、そのあたりについてお話しいただきたいと思えます。

**川平** 「人文」の「文」の字は、伝統的に読み方がさまざまで、白楽天の詩集『白氏文集』の「もんじゅう」には「ぶんし

ゅう」という読みやその他もあって、「ぶん」と「もん」は共存しています。和暦の年号の「天文(てんぶん)」と「てんもん」など。人文の「文」もブン・モン、に由来がある訳です。ここに持ってきたのは、明治一〇年代に出た「地文学(ちもんがく)」の入門書『百科全書 地文学』(関藤成緒訳 文部省蔵版 中近堂発兌)です。「地文学」はジオグラフィ、地理学。細かくいえば自然地理学の分野の教科書です。洋書の翻訳ものですが、明治一五年(一八八二)に初版が出て、学校に使う教科書用に『学校用地文学』として、翌年に同じ訳者で再版されています。再版冒頭の序文で、有名な漢学者・評論家の依田学海(百川 一八二三―一九〇九)が漢学の素養を傾けて、「地文」「地文学」とは何かを論じています。宇宙には天と地がまずあり、それから人がある。「天・地・人」です。三つの層に応じて知識・学問はさまざまに分かたれる。天についての「天文」「天文学」、地の「地文」

「地文学」、そして「人文」「人文学」。「地文学」の位置づけに関連して「人文」「人文学」に言及されています。漢学的な教養と用語法の中で捉えられた「人文」「人文学」の概念によっている訳です。こういう下地の上に、「ヒューマニティ」などに対応する訳語としての「人文」が被さっているのでしょうか。問題は日本近代における学の形成史につながりそうです。現在の用語法のみで「人文とは何か」を語ることはできませんが、概念自体、重層的に使われてきたのですから、概念史・学問史を跡づけることも、「人文学とは何か」を考えるための媒介的な作業として必要になると思います。

**ドレイク** 向こうでは、神学に対して、人文学と言うのです。つまり、キリスト教の神の啓示されたテキストとして世界を読むのではなく、人間自身の力によって世界や世界中の人類 (humanity) の諸伝統が生み出した文化的産物をありのま



『学校用地文学』〈上・下〉関藤成緒訳、明治16年刊。右丁裏は依田学海（百川）の「序」の末尾部分。右上に「人文」の文字がみえる。

ま、いわば世俗的に研究したり、ディベートしたりすることが humanities の目的意識にあります。

**北澤** そもそもヒューマニティーの伝統がこの国に存立しているのかというのも問題ですね。日本近代における「人文」について考えるとき、われわれは、どう

しても、この問題にぶつからざるを得ないと思います。しかも、仮に人間性というものがこの国においても貫徹されているとして、しかし、ヒューマニティーそのものが変質、変容しつつあるという疑いもぬぐえません。こういうことを考えると、なかなか複雑ですね。

**ドレイク** しかし、人間として、たまたま日本に生まれて、たまたまアメリカに生まれて、その「たまたま」というところを実感させることは可能じゃないかと思えます。つまり、日本に生まれたのは、けっして絶対的なことではなくて、たまたま日本に生まれたにすぎない。こういうことを実感させることは、ヒューマニティーの教育においては、一番の使命ではないかなという気がします。

**川平** 「人文」という概念そのものが、歴史性を帯びた概念だということはいいて、ドレイクさんがおっしゃったのは、



さまざまな文化性や歴史性を抱えながら、なおかつ、人知とか、ホモサピエンスの根源という次元で何か考えうるのではないかということですね。

**ドレイク** そうですね。そういうことが大切だと思います。

**川平** チンパンジーのアイちゃん（一児の母になりましたが）のような例を見ると、人知にとつての根源の問題としての言語や、言語獲得という問題は、文化性・歴史性の差異を超えてやはりあるように思います。

**ドレイク** いまの若いひとたちをみていますと、目の前のものに、すごく魅力を感じているのがわかります。逆に言うと、遠いものは、自分とはあまり関係がないと感じる。近いものは非常に親しい。その内と外の枠を突破することが、どうやればできるかということを探索する必要

があると思います。すべての人間が共有することのできる、しかし同時に自分の真ん中に普遍的な知的な層があるんだということを知らせておくことが大切だと私は思っています。

**北澤** たしかに遠いものへのあこがれが、学生から急速に失われていると感じます。これは、しかし、成熟した近代社会のあり方なのではないかというふうにも思います。それをそのまま受け入れるつもりはありませんが、遠いものへのあこがれを持ちなさいと言ったところで、何も始まらないような気がします。

正義感の在り方さえ、一昔前とは、だいぶ変わってきているのではないかと、先程申しましたが、それは変質したということであつて、決して学生の世代が正義感をもたないということではない。やはりどこかに、異なるかたちの正義感、善悪の境を持つているのにちがいはありません。ただ、その在り方やあらわれ方が

昔とはちがってきている。成熟した近代社会において、今の学生の世代が、そういう、われわれには、ちょっと理解がしがたいような生をリアルに生きている。そのような人々が、いわば「他者」としてわれわれの目の前に立ち現れている。

これと、どう関わっていくかということ、教育的にも研究上でも重要な課題であると思います。これは、われわれの研究が、どれほどアクチュアリティをもちうるかという試金石でもあると考えるのです。若い人と接触していくなかで、自分自身も変わってゆくし、また、若いひとたちも変わってゆくということ、いかえれば学生から学ぶ姿勢が、学生から何かを引き出してゆくことにつながるのではないかと、これを、ちかごろ切実に思います。みなさんのご発言を踏まえていえば、「人文学科」というのは、動いてゆく時代のなかで、学生と協同的に作りつづけてゆくものだと言えるかもしれませぬ。

**司会** 最終的に、結論というものは出ませんけれど、理想と現実が織りなす綾のようなものを、どうやら浮かび上がらせることはできたように思います。あるいは、すくなくとも人文学科の可能性を切りひらいてゆくための試行錯誤の意味は、じゅうぶんあつたのではないかと思いません。長時間、どうもありがとうございます。